

友の会だより

雑誌特集号

一度読んでみて欲しい雑誌を紹介
雑誌が楽しい

雑誌の過去と未来

対談・サブカル雑誌
「雑誌は本当に必要なのか？」

すべての雑誌を愛する人へ

「古い雑誌は絶対に捨てるな！」

寄稿

教えて！鈴木先生
婦人雑誌のリッチな世界

2012.6

19

雑誌が 楽しい

毎年、7月21日～8月20日は日本雑誌協会が定める雑誌愛読月間だそうです。越前市図書館は県内でも雑誌の所蔵が豊富で、また2007年12月、全国に

先駆けて雑誌オーナー制度を創設した歴史もあります。ただ今の所蔵数は中央276種類、今立56種類。その中から今回は、友の会事務局員がお気に入り1冊をご紹介します。

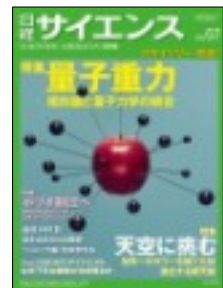
この本読んで!

えほんの雑誌。絵本の雑誌といえは「MOE」が有名であるが、お話し会のプログラム作りのヒント（最終判断は自分でするべきですが）も織り込まれている。作家からのメッセージや絵本関係者の連載（勿論テーマは児童文学に関するもの）も丁寧に掲載されており、雑誌では勿体ないな、と常々感じている1冊。絵本好きにはおすすです。（長）



日経サイエンス

雑誌といえば、時期が過ぎれば紐で縛って資源回収へ…となるどころ、30年も捨てられずにガレージに鎮座しているのが「サイエンス」（現在「日経サイエンス」）である。中学生の頃、コヨーテの写真に惹かれて手にとった。メインであるはずの研究記事はさておき、「ぶつくれびゆる」がそれだけでも本に成りうるほど素晴らしい。養老孟司氏が海野和男氏の『チヨウの世界』をそれは丁寧に書き上げています。何度読んでも飽きない。海野氏の写真集がそうであるように。現在はどうなっているのだろうか、最新版を手にとる。あった！（タイトルがカタカナと英語になっている）科学に対する憧れと、「学」へのひたむきさが時をこえてこんなにも人をひきつける。（澄）



歴史読本

数ある雑誌の中で、どの雑誌がお気に入りか1冊を選ぶのは難しい。如果说えは「歴史読本」を選びたい。なぜなら、最近、歴史小説をよく読むようになったので。一口に雑誌と言っても、経済雑誌、女性向け雑誌、男性向け雑誌、歴史物、趣味、健康、パソコン関係に加えそれぞれの年代に合わせ、雑誌が発売されている。2、3年ほど前までは、「プレジデント」、「日経ビジネス」、「週刊東洋経済」等をよく読んでいたが、現在は他の雑誌と等間隔で読んでいます。今は、自分の年齢によるかもしれないが、定期的に読むのではなく、気になった記事が出た時に、その雑誌を読んでいる。（上野）



婦人画報



いつも手にとるのは美容院で……。

極上の宿や、美しい盛り付けの懐石料理、着物、アクセサリーなどの贅沢な写真を眺めながら出かけたり、身にとまったつもり……。

季節の花や風物詩を紹介する日本語の奥深さにはとすることもしばしば……。でも一番好きだったのは、高峰秀子さんの事を書いた斎藤明美さんの連載でした。現在は「安井かずみのいた時代」のコーナーがお気に入りです。

髪が整って、現実にもどるまでの月に一度のシンデレラタイムを演出してくれる、私の大事な一冊です。(杏理子)

歴史読本



最近、TV番組でよく紹介される歴史の謎や歴史女に代表されるように、プチ歴史ブームです。そこで私が薦める雑誌が『歴史読本』です。サブタイトルに「歴史の楽しさ再発見!!」とあるように、既に教科書等で知られている史実を、新しい観点で、やや専門的ながらわかりやすく写真と図、文章で紹介しています。

毎月様々なテーマを題材にしていますので、自分が興味のある部分がありましたらぜひご一読ください。(小林)

BE-PAL



アウトドアや環境問題、動植物の保護に関する月刊誌。最近始めた本の整理で、250冊ほどのBE-PALを断腸の思いで廃棄した。

長年買い続け、溜め込んだ我が家のアウトドアの履歴でもあった。

子供たちが幼稚園から小学校低学年の頃、我が家は晴れの日といえば、車にテントと炊事道具を積み込んでキャンプ地や高原めぐりをしていた。

ちょうどアウトドアブームの走り中、雑誌からの道具の知識やキャンプ場のほかの家族の持ち物に、見るもの見るもの興味津々であった。

子供も成長しBE-PALに お世話になることも少なくなりましたが、今立1000年の森、「あやしい探検隊・椎名誠」氏との交流や、敦賀・中池見湿地の笹木智恵子さんがBE-PALに掲載されたことなど……。

いろいろと楽しい、毎月の発行が待ち遠しい雑誌であった。(M)

ねこのきもち



目を細め、じっと私を見つめる「好きよ」

我が家の猫は私に色目を使います。

「ねこのきもち」でそう学びました。

この雑誌は数あるねこ雑誌の中でダントツの人気です。

お値段は高め、本屋さんでは買えません。

発売元はあのベネッセ。

ねこのためのわかりやすく、ていねいな学習書なのです。

しっぽの振り方やしぐさ一つでも専門家が解説し、ねこの気持ちを教えてくれます。

顔面マッサージと歯みがきの記事を参考にして、さっそく施してやりました。

でも歯みがきは至難のわざです。姉妹雑誌に「いぬのきもち」があります、まるつきり興味がわかない私です。(美)



対談

マニアックなサブカル系雑誌について

(ある日の編集会議より)

「やっぱりBRUTUSの雑誌特集なんかは本好きな連中にはたまらなかつたですね。クセのある個性派本屋さん紹介なんて

のも最高。そこでのブックハンティングなんかはワクワク、ドキドキの世界ですよ」

「特に70年代から85年あたりは雑誌の黄金期とも言われているよね。初期の**宝島**とか**POPEYE**とかは今でも高価で取引されているくらいだから……。いわゆる雑誌の名作だな」

「**Olive**のカフェ特集なんてのも意外とよかつたですよ」

「僕は**STUDIO VOICE**などは今でも特集によつては大事に保管してますね。サブカル系の雑誌の特集つてのは、やはり編集サイドの着目点とセンスが売り物でしたから」

「そつそつ、いわゆる女の子たちの雑誌の内容はスイーツ、雑貨、ファッション、アート、ギャラリーなどでしたが、**relax**や**東京人**、**Cut**なんかは一味違つたよな」

「芸術、文化の発信源としての雑誌は広く支持されていたと思う。読み手側が雑誌を選んでいるような錯覚もあるけれど、じつは雑誌によつてライフスタイルまでもコントロールされてるわけで、そのところがむしろ快感なんだよ」

「おいおい、あまりディープな発言はマニアックすぎて図書館の会報としてはどうな

雑誌は本当に必要なのか……？

「文」郷田三郎

趣味に迎合した専門雑誌は数え切れないほど発行されていますが、いわゆる一般的な雑誌の売上は激減しているそうです。もちろんこの原因は昨今の不景気も大きく作用していますが、PCで情報を得る人が圧倒的に増加してきているのも事実でしょう。わざわざ本屋に行かなくてもエンターキーひとつであらゆる情報が一瞬の内に入手できます。もっともそこにどこかしら物足りなさを感じる人も少なくはないと思いますが、時代逆行型の人か、残念ながら単なるお年寄りと言われても仕方がないのかも知れません。

確かに雑誌はスピード性に欠けるのもまちがいはありません。編集、印刷、配達、小売というプロセスは避けようがないからです。宅配システムを導入している発行物もずいぶん多くはなりませんが、逆に書店やコンビニで立ち読みしてしまえばOKという方も多いみたいですよ。残念なことではありますが、じっくりと読む、という行為が今は忘れ去られている傾向もあります。はたして文芸春秋や月刊現代、中央公論などは今後、どうなっていくのでしょうか。酒井寿紀さんがとても面白い説を唱えていらつ

のかなぁ・・・(笑い)」

「いやいや、今後はまだまだ深い内容になりますよ、きつと。ところで、雑誌って読者のターゲット層ってのがきちんとありますよね」

「あるある、音楽雑誌を例に取っても、まずジャンル別にあるね。クラシックやジャズはもちろんヘヴィ・メタル専門誌まで存在するからねえ。あきれくらいだ」

「大人のロック、オヤジ系ロック、なんてのも流行りましたね。もう昔の有名ミュージシャンも完全に60歳を越えてますからね」

「だよ、ローリング・ストーンズなんかは全員がゾンビみたいだもの・・・。彼らは今でも青春なんだな。ロック雑誌も一時の勢いみたいなものは無くなったけれど、それはそれでまたオモシロイ時代になってきたよ」

「」・「おじさんこと植草甚一が亡くなったからずいぶんたちますが、当時はかったたるいオジサンとしか思わなかったけれど、今読み返すとかなりアナーキーな人だった。もしも今、彼が生きていたらどんな雑誌を出すのかな・・・」

「さあ、あいかわらずジャズを聞いたり、古本屋さんを回って箱で買ってるんじゃない

いかな。今は温故知新しかないのかも知れない」

「先日、大昔のSFマガジンをどつさり買っていく若い女性を神田で見かけました。なんか妙に嬉しかったですね。声をかけたくなつた!」

「そついう人、いるいる。女性でもハヤカワのミステリー・シリーズがスラリと並んでいる人、いますしね」

「この会報でも江戸川乱歩やアガサ・クリステイの特集も考えてますよ。水木しげる特集もやっちゃうかも・・・」

「ええつ、**彷彿月刊**ならぬ**彷彿会報**だ・・・(汗)」

「雑誌も会報もけつして消耗品であつては駄目だと思えますね。この図書館の会報のバックナンバーにもプレミアがつくくらいでない・・・。赤瀬川原平や荒俣宏喜んで寄稿してくれるようなモノじゃないと発信側も受け手側も退屈ですよ」

「なるほど、恐ろしく過激な意志表明ですが、そつなると発信サイドも快感ですね。まさに**幻影城通信**だ(溜め息)」

しゃいます。平均的な人をターゲットにした一般総合雑誌は「一定の大きさの器に、可能なだけ読者が読みたいものをぎつしりと詰め込んだもの・・・」と定義して、それは一種の「幕の内弁当」だと言っておられます。じつに面白い考え方ですね。

しかし、雑誌が電子書籍になっていくとはどうしても思えません。今後も出版不況はほとんどエスカレートしていくと考えられます。巷の雑誌も相次いで休刊、廃刊となっていくのは必定でしょう。主にノンフィクションや政治・社会問題をメインに扱っていた有力雑誌ですが、時代の変化にはついて行けず販売数は減少する一方のようです。以前のように同じ雑誌を定期購読するよつな律義な読者はもはや少数派となっているそうです。趣味の多様化、移り気な読者、不況・・・さらにこれらには政治不信も大きく影響しているのかも知れません。若者までもが社会に対して無関心になっていく中、今後、意識拡散している読者のニーズを把握していくのは至難の技ともいえるでしょう。その雑誌を強く指示する固定読者に支えられてこそ、雑誌は存続が可能なのですから。世の中の無気力、沈滞ムードを打破していくためにも、こうした雑誌には頑張ってもらいたいですね。

(街中の散歩者)

古い雑誌は

絶対に

捨てるな!!

書店に行くたびに多種多様な雑誌に巡り合うことができる。ファッション雑誌からインテリア、レシピ、旅行などの女性雑誌に加え、マイナーな趣味全般、スポーツ、政治、軍事、経済など、今やどんな分野も専門雑誌が発行されているといってもよいだろう。

早い話、ペットのウサギのウルウル雑誌から、鉄道、音楽、軍用機からアニメ、カメラ、車、オートバイ、オカルト、あげくは囲碁、将棋、盆栽、さらに天文から医療雑誌まで、

失礼な言い方かも知れないが、オタクによるオタクのための専門雑誌が目白押しなのである。これらの他に膨大な種類の総合雑誌や娯楽マンガ雑誌が多数存在するし、さらには怪しげな風俗雑誌まで、一体どれだけの種類の雑誌が発行されているのだろうか。

僕の場合は完全な雑誌少年だった。喫茶店や散髪屋さんに置かれていた少年サンデーや少年マガジン、さらには大人が読み捨てていった平凡パUNCHやプレイボーイといった

雑誌などから、マンガはもちろん、SFやミステリー、ホラーからサブカル全般、あげくは官能小説までもを貪欲に吸収していたのだ。単行本を入手するようになったのはかなり後になってからである。

ところでこのような雑誌は百科事典が生まれたのと同様に、新しい情報・知識、及び視点を広く一般庶民に紹介するものとして誕生したと言われている。なんと1665年にすでにパリでは法律家のズニー・ズ・サルによる

「ジュルナル・デ・サバン」なる本格的な雑誌が創刊されているし、時を同じくしてロンドンでも「フィロソフィカル・トランザクション」(The Philosophical Transactions)「」が創刊されている。ちなみに世界で最初に magazine なる語を用いたのは1731年のロンドンの「ジエントルマンズ・マガジン」らしい。我が国においては1867年(慶應3年)に洋学者の柳河春三による「西洋雑誌」が最初と言われている。

ところで断捨離(だんしゃり)なる言葉が流行って久しいが、趣味の雑誌で部屋中が埋め尽くされている方々もいらつしやるのではないだろうか。特に好きな特集などで捨てられない雑誌も少なくない。小型のスキヤナでデータ化する方法もあるし、必要なページだけをスクラップして整理するのも一考だろう。しかし、

60年代の雑誌などはすでに表紙からして捨てられない。なつかしい以上のレトロさで、こうなると古書マニアの範疇になるのだろう。亀和田武の書物の中に「セクシー雑誌の刺激と毒と・・・」という項目があるので引こう。

「実話三面記事」「夜のタネ本」「実話と秘録」「漫画の本」「事件探訪」「キューティ画報」。

どれも半裸の女性モデルを配した、いかがわしい雑誌ばかりだ。一冊ずつ見れば、チーフであか抜けない印象しかないが、こうして膨大な量が並びと圧倒的な迫力がある。

サブカルチャーという洗練された概念ではくれないのが実話雑誌やヌード誌だ。読み捨てを前提に作られ、警察やPTAの目の敵にされた泡沫雑誌、傍流の文化が、これらのセクシー雑誌である。

(引用終わり)

公的な図書館の会報に、なぜわざわざいかがわしいエロ

雑誌関係の文章を引用をしたのか、戸惑いの読者も多いとは思うが、仮に文化遺産などという大袈裟な言葉を使用させていたくならば、決して図書館はその機能を完璧に持ち合わせてはいないのでないか。その証拠に古い雑誌はほとんど破棄しているのが現状だろう。真のサブカル関係書物の保存を担っているのは古書店関係者や世のクレージー

な在野のコレクターたちなのである。小綺麗な単行本だけでは絶対に過去の文化をひもとくことは出来まい。無数の雑誌やチラシにこそ当時の赤裸々な(！)庶民文化が凝縮されているのだ。あの江戸の浮世絵が今では芸術品、美術品というのが皮肉だが、昭和・平成のグラビア印刷の雑誌もやがては同じ運命をたどるのかも知れない。

文：三田村善衛

勅使河原麗美

なるほど婦人雑誌に限らず、雑誌というものはある意味において読者に夢を与えるものなだろう。美容院や歯科医に置いてある婦人雑誌を開くと、そこには決まって高価なジュエリーを身につけたセレブな生活が公開されている。しかも特集は美術館や歌舞伎、オペラ、海外リゾート、さらには白洲正子や北大路魯山人であったりするから恐れ入る。これで自分もあたかも文化をリードしているかのような気分になってしまつたら余計にコワイ。誌面もゴージャスのひとことに尽きる。内容はもちろん、紙も印刷も豪華で高めた。ターゲットはヴィクトンの似合う富裕層のミセスあたりとしか思えないが、果たして実際の所はどうなのだろうか。

よくよく分析してみると、このミセスとは単純に既婚者ではなくて、既婚と自身の女性すべてをさすよつだ。シングルのキャリアウーマンや水商売、客室乗務員の読者も大いに違くない。名門ブランドが似合う人にしか読め

ないと誰しもが思つてしまつ。たしかに女性の社会進出も当たり前になり、主婦層も以前よりははるかに行動的になつた。男性諸氏が知らない所でカフェしたりランチしたりもする。しかしシャネルよりは洗いざらしのシャツが素敵であることもある。安価な古着もなかなか魅力的なのだ。なぜリッチな勝ち組奥様にだけ憧れるのだろうか。どこの家を拝見してもイタリアやフランスのインテリアが並んでいるわけではない。誰もが高級美容室やエステに時間を費やしているわけでもない。叶姉妹のような生活は、そう簡単には手に入らないのだ。世の中のほとんどの主婦はパートで働いているはずだから、ブランドものファッションやジュエリーなんて夢また夢。

笑えるのは、ローティーン、ハイティーン、女子大生をターゲットにした女性誌も数多く出ているし、そこからOL、結婚間近組、ヤングミセスと細分化されていくわけだが、ミセス雑誌となると、それがすべてゴージャス・リッチ組だけではなく、より現実的な今夜のオカズ満載の生活便利派雑誌も数多く存在していることだ。やはり、である。内容も質素な低価格ファッション、肥満解消ダイエット術、節約買い物特集、便利な収納法、実用的な台所用品、かわいい生活雑貨・・・女の夢というよりは現実

的な主婦の多忙な毎日、というイメージだ。ここに女性の人生の大きな落差が露呈している。

しかし、こうしたグンゼ主婦層もたまに美容院に入れば、リッチなマダム雑誌にうつとりするのだから始末に悪い。やはり女は夢を追いつけるのだろうか。しかもこうした雑誌を作っているのは世の男たちだというのもしじつに滑稽な話だ。

(詩人)



おしえて!! 鈴木先生

回答者 鈴木晴代氏

(元・京都ブックトークの会代表)

ブックトークやおはなし会の準備に
おすすめの雑誌はありますか？



図書館や学校でボランティアの方々が子どもたちに読書の喜びを届けるための活動をされるようになって、さまざま

な参考図書が刊行されています。中でも、定期刊行誌の長所は、月刊や季刊、いずれも大切にしたい折々の季節感やその時期の行事・伝統を旬で取り上げることができ、且つ、出版についての新しい情報を手に入れることができることです。それはとりもなおさず、子どもたちの待つ現場に赴くボランティアにとっては、選本のヒントに、プログラム作りに、会場雰囲気作りにと、即役立つことができそうです。

この場合に、それぞれ微妙に異なる編集の意図があり、その特性をしっかりと把握しておくことが、選本力をつけるためにも必要だと考えて下さい。例えば、同じ新刊紹介の記事であっても、『この本読んでー』や『子どもの本』など、本の作り手の側(出版

社サイド)が編集・出版する刊行物は、本の販促PR活動でもあるわけで、本について批判的な切り込み方はされません。一方で子どもの本の現況を研究、精査しようという意図が明確な立場の編集では、本の批判・批評が重視されます。『子どもの本棚』では、『子どもの本を見る選択眼をゆたかにするため、書評を重視した』という編集方針を創設以来明確にしていますし、『こどもとしょかん』では評論や資料にも重点が置かれているようです。また、語りに重点が置かれているものもありという具合です。

安易な情報の取り込み方を常用するのはなく、あくまで、自分で本を選んでいく目を磨くための参考として利用したいものです。選本力は、自ら繰り返し作品を読むことで身につけていくものです。時には、お助けマンの力を借りてその場しのぐことがあったとしても、安易な情報の種に頼り過ぎることがないよう、あくまで作品と出会うための情報源の一つとしてとらえて、使いこなしていただきたいと思います。(ここでは【雑誌】とは定期刊行誌としてとらえています)

多種、そろって至れり尽くせり

多崎和子

雑誌と呼ばれる類の書が、一体どれ程、図書館に並べてあるのかを調べてみました。

越前市中央図書館に237冊、鯖江市に193冊、県立に592冊、その多さにびっくり。わたしにとっては意外な驚きの数字でした。戦前、戦後すぐの、乏しい文化でもあり、一方的文化でもあり、日々食物すら窮乏の頃、幼児期の読書の記憶はとほしいです。レコードやラジオからの音声がつつすらと残っています。少し大きくなって通いつめたのが、土蔵の武生図書館と貸し本店です。少女雑誌、映画雑誌、月刊小説の類です。



「少女」、「スクリーン」、「暮らしの手帖」、「婦人之友」等々。毎日、少しずつ貪るように目で追い、身体の奥深くしみ入って来た記憶が甦ります。

そして現在、あふれる雑誌類への反応は、随分鈍くなっている昨今です。

(編集部注:多崎氏の記事中の、中央図書館の雑誌の数は一般開架のものです)

優れた本は何時の時代にも読み継がれる

森浩一編 社会思想社刊「鉄」

雨降る日曜日。朝。旧知のM

君から電話で呼び出された。この日の午後、越前市白崎町にある日野自然学校の解体跡地で廃校記念の宴会があり、広野ダムの奥で釣ってきた尺イワナの骨酒を飲ませるから是非参加してくれというのである。忙しい仕事をアルバイトのFさんに丸投げして、酒盛りに参加するというのはいくらなんでも人の道に反すると思うのであるが、遊びの誘惑には負け続ける私は、文明くんの車でいそいそと雨の中を出かけるのである。

白崎町の田んぼの中、青いビニールシートの下では焚き火を囲み10人くらいの男たちが集まり、勝山の山菜や猪を肴に宴会

が始まっていた。私の知り合いは母の通夜にお経さんを上げていただいた電気屋の役僧さんと、君そして年長のO氏の3人だけであつたが、焚き火で炙つたイワナと骨酒を鍋ごと振舞われ、「さ、公達や」とばかりにはやされ、浮かれて木灰と田んぼの泥にまみれた。

その後、雨もやまないので場所を変えて近くのOさんの家にごくどかかと上がり込んだ。ご家族の迷惑も顧みず、わけなしの有様であつたが、彼の本棚には私には興味深いジャンルの貴重本が無造作に何冊も並べられていた。その中に昭和49年、社会思想社刊森浩一編の「鉄」という本があつた。

その内容の一部には福井県内の鉄に関する記述が見られた。金津とはよく言つたもので、縄

文後期には細呂木には鉄の鋳炉跡が存在し、森浩一はその鋳炉跡を発掘調査していたというのである。私は半島や南からの鉄の伝来が古代日本と古代王権を方向づけたと考えていたのでこの本の考古学者森浩一と歴史学者林屋辰三郎の対談はたいへん興味深く、示唆に富んだものであつた。

それにつけても、私たちの世代が、かの1960年代後半にはこんなにも有能で気骨ある関西の学者たちを「大学解体」という乱暴なコンセプトで大学の研究室から追い出したことを思うと忸怩たる思いがある。しか

し、神々の怒りとも言える壊滅的な自然災害と原発のメルトダウンを経て、未だに安全神話を語り続ける人々を見るにつけ、大学は誰のために学問をし、何の研究をしているのか。目指すべき方向性を見失っているように思える。

話が著しくそれてしまつたが、快適な市立図書館ではなく土砂降りの泥田の中でも優れた本と出会う奇跡のような時を持つことができたことを嬉しく思う。またこの白崎町は戦国大名・金森左京ゆかりの地であり、私の高校時代の恩師である岡崎先生も古武士然として御健在で、今でもかつての教え子たちのことを気にかけてくださっているとのこと。この街を諦めなくてよかったと、この地に来て今日はずくづく思った。

(栗波和夫

武生クラフトセンター代表・ブックカフェゴドー店主)

「YA倶楽部」は、十代の読書活動の推進を目的とした活動を行っている。越前市中央図書館を拠点に、月一回の活動を続けてきた。毎月の例会では、通信作成、中央図書館YAコーナーの展示がメ

インである。初期メンバーは既に高校を卒業し、大学、専門学校、就職と、それぞれに忙しい中、時間を見つけて参加している。今回は、例会活動の中から、YA通信のできるまでを紹介しよう。

これがYA通信作成の現場だ！

某月某日曜日 午前9時半

図書館会館時刻。中央図書館エントランスホールで開館を待っている人の中に2・3人のメンバーが見受けられる。少々遅れて到着した唯一の大人（YA世話役・イシハラ）と共にカウンターで鍵を受け取り、グループ室へと移動。実はこの開始時・終了時のぞろぞろ歩きが、静かな館内ではかなり目立つ。三四人ならまだしも、十人も集まった日には、閲覧者の視線が一斉に集まる。

午前10時

グループ室に入り早30分、一向に作業開始の雰囲気はない。なぜなら、このひと月に仕入れたネタ（面白話）を、てんでに語らないことには活動はスタートしないからである。メンバーの年齢・所属校等がバラバラである故の、必要不可欠なロスタイムと言えよう。しかし、10時を回るときさすがにそろそろという感じになってくる。参加メンバーが多いときは、YAコーナー担当・通信担当に分かれ、いよいよ活動開始。

《通信タイトル》

担当するのは主に「絵描き」の零樹。まずはその月をイメージしたキャッチコピーの下案作成に時間をかける。「サクラの花散る季節です。」「雪も黄砂も降る春。」「どうせ花より団子の青春さ」etc... 五つほど考えた中からメンバーで相談して一つに決定するのだが、本人の思いとは裏腹に、おまけで書いた案が採用されることもしばしば。選ばれたキャッチに合わせて、白抜きタイトル文字を塗り、小さくイラスト、日付けを入れて完成。

《メイン企画》

回り順で担当する企画。おすすめの本紹介を基調に、イベント前後なら告知や報告、今月のYAコーナー紹介など、真面目な内容が多いので、担当決めは毎回難航、結局、応用力がある「物書き」淡雪やリク、スズカが書く羽目になることが多い。

《YA座談会》

回り順で担当するコーナー。こちらは、ゆるゆるの内容なので、案外引き受け手が多い。時節に合わせたテーマ（『入試の思い出』『母の日のプレゼント』『菊人形といえは』など）に関してメンバーが雑談する中からいくつがピックアップし、会話の形に再構成、オチを付けて締める。担当は「絵描き」遠子、「物書き」サラなど。案外短時間で完成する。

《四コマ漫画》

担当するのは、主として「絵描き」カッパ巻き。その日のネタ、活動途中のエピソードを取り上げて、起承転結にまとめる。若いながらも筋金入りの漫画家志望少年だけあって、その達者な線には皆の賞賛が集まること多し。時には、ほかのメンバーの下案を絵にすることも。彼の描く漫画に登場するYAメンバーは、彼目線でキャラが設定されており、それぞれが微妙な思いで受け止めている。

曰く、「いつも俺って、顔に縦線（ちびまるこちゃんの藤木君を思い出そう）が入ってるよな」。ネガティブ発言を取り上げられている本人の苦情は、他メンバーの、だっていつもブーたれてるじゃん、の声にかき消されるのだ。口は悪いが根は生真面目者、京都でも挫けずがんばれ！

曰く、「え、ワタシの方が年下なんですけど、なんで上から目線になってるんですか」。カッパ巻きの第一印象で、勝手に高校生にされてしまった。その冷静でしっかり者っぽい雰囲気、絵にするとそうなっちゃうんだ

よ。今春、本物の高校生になったから、キャラに追いついたね。

曰く、「なんで毎回、人がドジ踏んでるとこばかりネタにするわけ？もっとうい役にしよう」。連続して笑いのネタにされている。だってセンター、その通りのキャラじゃないですか！という大合唱で、本人の希望は即却下

11時30分

作業を始めて一時間半、そろそろ時間切れが近づき、みんな必死の形相になってくる。グループ室の使用は十二時までではあるが、通信が出来上がるのはたいして十二時に十分ごろ。毎回時間オーバーである。次の使用団体がまだ来ない間は、なんとか延長で使わせてもらっている。

12時20分

四コマ漫画のベタ塗りを二人がかりで終わると、それぞれのパートを台紙に貼り、手作りのYA通信が完成。鍵をかけグループ室を後にする。衆人の注目の中（？）団体でカウンターへ。所属高校の図書室に届けるべく通信のコピーを待つ者、家族を迎えを頼む者、自転車で帰途につく者、連れだっけ遊びに行く者...。次の例会での再会を！

約3時間をかけて作成されるYA通信、直接の反響はほとんどないといえ、中央図書館に掲示された通信に足を止め見入ってくれている利用者の姿や、図書室に貼ってあったね、これおもしろいよねという声に支えられての活動、メンバーがいる限りは続けていきたいと思っている。

ものごとには、大概、始まりと終わりがありません。

宗教的あるいは哲学的な世界では、「普遍」とか「永遠」がよくテーマとして上がりますが、自分が今思っていることはそんなに深いことがテーマではありません。

たとえば、新入社員。会社に入ったことが始まり、退職が終わり。入学と卒業。入院と退院といったよつなもの。

若かりし頃、物事の始まりには「よし、なんとかやり遂げてやる」あるいは勝負事なら「がんばって練習して、勝つてやる」という気持ちがあり、一種の始まる喜びを感じることででき、さらに努力すればするほど、結果が出たときには終わる喜びがあったものです。

ところが、最近は挑戦する喜び、取り組む喜びより、「まあ、いいか」というこだわり？の

季節の日記

美しく枯れること

02

ない感覚が多くなりました。

実は、先日我が家の田植えが終わりました。と言っても、自分が田んぼに入って泥化粧をした訳ではありません。

耕作面積の小さな兼業農家では、トラクターや田植機などの農業機械を持つことができません。それで大規模農家に代掻きから田植え、さらには田植え時に機械で施肥と除草剤の散布までいっしょに頼んでいます。

散歩がてらに田んぼに行ったら、「苗が植わっていた！」こんな状況で、「田植えが終わった」という喜びを感じることはありません。

秋の収穫の喜びもおそらく感じないことでしょう。

「まあ、いいか」というこだわりのない生活は、達成感を与えてもえませんが、いろんなことにこだわりを持ち過ぎ、さらには欲も強すぎるのもど

うかと思いませんが。

歳相応に穏やかな心で暮らしている人の「枯れた心」は魅力で、素直に人の生き方を受け入れられる心を美しく感じます。でも、美しく枯れていくことと、気力・意欲・こだわりが少なくなつて怠け者になり枯れていくこととは、きつと大きな違いがあることでしょう。

「寂と錆び」の違いのよつに。



お酒の時間

(ヤ)

一般にお酒を飲む人は甘いものが苦手、と思われている気がします。僕自身全然そんなことはないし、むしろ甘いものは大好きですが、なぜでしょうね？

僕が好きなスイーツのひとつに、ホワイトチョココレートがあります。ちよつと成分が違うだけに、「こんなものをチョココレートと呼ぶな」と言われることもありますが、面白い存在です。口に入れてほろほろと溶けていくその瞬間は、有終の美を体現しているかのような切なくも美しい時間です。

さて、世の中には酒飲みが顔をしかめるようなあま〜いお酒が結構たくさん存在しています。有名なものと、ベイリースやグラン・マルニエ、カールアなんかもそうでしょうか。僕ももちろんそういうお酒は好物ですが、今回取り上げるのはチョココレート味のお酒です。

オーストリアのザルツブルクの名産品『モーツァルトクーゲルン』名前は聞いたことがなくても、見ればわかる人は多いはず。お土産としても有名な、金色の包装紙に包まれた丸くて甘いチョコです。それにちなんだお酒が、『モーツァルトチョココレートリキュール』です。

モーツァルトクーゲルン

モーツァルトの顔が
箱に描いてある



モーツァルトがチョコ好きだったとかが覚だったという話は聞いたことがありませんが（確かショパンは甘党でチョココレートが好きだったとか）

よくお酒は飲んだそうです。そのせいか、日本酒を造る際にモーツァルトを聴かせるという話も聞かれます。

食後の一杯に甘いものが好きな人はこのリキュールを、苦手な人は日本酒をくいと飲めば、どこからともなく天才の調べが聞こえてくる...かもしれませぬ。



平成24年度子ども本を楽しむ会

- 4月20日(金) 絵本実践講座 乳幼児期向け(終了)
- 5月18日(金) 絵本実践講座 児童期向け(終了)
- 5月15日(金) 子ども本の歴史的背景を読み直す(終了)
- 7月20日(金) 再び加古里子
- 8月24日(金) ジョン・バーニンガム(今立図書館)
- 9月21日(金) 絵本と文学の関わり・五味太郎
- 10月12日(金) 心を伝えるマイケル・グレイニエツ
- 11月16日(金) 素敵にあそぶ山本容子
- 12月21日(金) エルンスト・ヤンドウルの人間関係
- 1月18日(金) 喜び怒り哀しみ&楽しく長谷川義史

午後7時〜8時30分
午前10時〜11時30分

会場は越前市中央図書館学習支援室(第5回のみ今立図書館)

前年度に引き続き、今年度も仁愛大学の谷出先生による講座を開講しております。今回も早くから30名ほどの申し込みがありました。毎回出席できなくても受講できます。各回、1テーマですから、都合のつく回のみ参加でも充分楽しむことができます。

第1回目の絵本実践講座では乳幼児期を対象に、子どもの発達と絵本の関係、赤ちゃん絵本の実際について、スライドショーや先生の研究結果を交え、即実践に活かすことのできるアイデアや赤ちゃんへの接し方を学びました。また、ブックスタートの重要性を再認する機会でもありました。

第2回目の絵本実践講座では、児童期を対象に“子どもを知る”てがかりとして小学生の教科書がとりあげられました。実際に国語の教科書の目次を追って子どもが親しんでいる作品、作者に着目した選書、同一テーマの選書、詩の朗読や“読み合い”の試みも新鮮な体験でした。

この2回の実践講座を通して学んだこと 対象となる子どもをよく知ること、たくさん本を知ること、読み手が本の中身をよく消化しておくこと。学校ボランティアの立場と役割をわきまえて現場に臨むこと、そしてこの講座は相当驚沢な情報源でありメテナンスの場であるということです。(澄)

図書館友の会の活動のなかで、図書システムの研究を始めたいと思います。

趣味でパソコンを活用していて、蔵書の単品管理などを経験しました。

最近、学校の図書館を管理している先生方の共通の希望として、図書の貸し出しシステムや貸し出し頻度などのデータをコンピュータで行なえないかということがあります。

現場の研究会もあるようです。

ルーチンワークや本のバーコード管理などは、先生や係の生徒の省力化に貢献するに違いないと思います。

しかし、生徒個人の書籍利用についてのデータは個人情報なので、担当の先生のきちんとした情報管理が必要です。

図書システム研究会は、前段の省力化とデータ収集の具体的な簡易システムのモデルを提示することを目的としています。

一部の学校では、図書管理システムの導入が既に完了しています。

研究会では、この事例を参考にしながら、より使いやすく、かつ迅速で簡易なシステムの構築を探りたいと思います。

興味とスキルをお持ちの方を募ります。

(M)



「わんぱく戦争」

イヴ・ローベル監督(1963年作品) 90分



フランスで権威ある文学賞「ゴンクール賞」を受賞した、ルイ・ベルゴの名作「ボタン戦争」を映画化した作品。南仏の片田舎にある隣り合った村、ロンジユベル又村とベルラン村の子どもたちは、いがみ合いを続け、対立、戦争、報復を繰り返して、大人たちにとってひどく叱られる日々。

むかしの小学校では、子どもが見てもいい映画(当時、許可映画と言った)が市内の映画館でかかると、先生が映画の割引券を配ってくれた。たいてい二本立て、三本立てで、ものすごくうれしかったのを覚えている。わんぱく戦争は、その割引券をもらって、小学校低学年のときに、市内の広小路劇場で見たような気がする。今、解説を読むと、南仏の片田舎の村

に巻き起こる子どもたちのほのぼの大戦争とあるが、当時はどこの国かも分からず、外人の子どもらもが二手に分かれて、戦争まがいの悪さのし放題という低学年にはちょっと怖い映画だった。なぜ怖いかというと、逃げ遅れて敵に捕まると木にしばられて、すごく屈辱的な扱いを受けるからである。

この映画では、敵の服のボタンを奪うことが勝利の勳章で、ついには、ボタンを取られまいと素っ裸で攻めてくるという奇策に出る。大勢の男の子たちがフリチンで走ってくる映像は、それから以後何十年という月日が流れたが、二度と見ることはできていない。DVDの付録映像を見てみると、若かりし寺山修司も感想を述べている。映画の冒頭 イザユケヤ仲間たちメザスハアノ丘 のメロディも懐かしい「わんぱく戦争」、ぜひ中央図書館のDVD陳列棚で手にとってみてください。お勧めしません。

(K弟)

館長挨拶

越前市中央図書館長 田中文造

はじめまして、本年4月の人事異動で楠館長の後任として中央図書館長を担当することとなりました田中です。

私にとって図書館業務は、経験のない新しい分野の業務ですが、図書館のスタッフや図書館ボランティアの皆さん、関係団体の協力・支援いただき、精一杯努めたいと考えております。

越前市では、今年度「子ども読書活動推進計画」を関係団体の協力を得て策定を進めています。

計画の内容は、越前市がこれまで取り組んできた活動内容を、出生から高校生に至る発達段階に応じ、家庭や学校・地域・図書館・ボランティア団体の関わりを更に具体的に述べ、子どもが本に出会い進んで読書する環境づくりを進めるものとなっております。

策定後の事業推進に際しましては、会員の皆様のご支援、ご指導をよろしく願います

講談社全国訪問おはなし隊

4月15日(日) 午後2時

越前市中央図書館学習支援室
およびエントランス横広場



花吹雪舞う青空の下、トマト色のキャラバンカーがやってきた。

タラップがあり、車内にずらりと並んだ絵本が見え隠れする。子どもでなくともわくわくする。お花見の家族連れがなんだなん

だと集まってくる。子どもたちは待ちきれず、「ねえ、何時から?」「もう、いい?」とつめよってくる。敷物が敷かれ、会場のセツティングができあがると、大人でさえ、「ねえ、もうよんでもいい?」じつとしていられない。

開場と同時に、親子連れ、お孫さん連れ、思い思いの場所で絵本を広げ始める。

ページをめくる、風が渡る、時折顔を見合わせてほほえみ合う。お日さまのにおい、本のおい。大勢いるのに、ちっとも騒がしくない。みんなで、浸っている。夢中になっている。

おはなし会も大盛況。隊長とアシスタントのおにいさんおねえさん(?)との手遊び、掛け合いもいきいきと、静かなおはなしにはじつと集中して耳を傾け、30分はあつという間、さすが絵本の底力。

おみやげの袋には、なめても大丈夫なミニ絵本や絵本選びにもってこいの雑誌などなど。「またね」と手をふる。

全てを撤収し、キャラバンカーを見送る。祭りの後の寂しさが、薄墨色の春の夕暮れに托けて馴染んでいく。(澄)

古本市に寄せて

4月22日(日)

今立図書館周辺

アースデイ越前会場にて

今回は、前日からの激しい雨で当日も朝から雨でしたので、今立図書館の2階学習室で古本市を開催しました。少し肌寒く、雨が降っており、また、館内での開催で場所が分かりにくかったにもかかわらず、多くの人に訪れていただきました。

根強いファンや、ちよつとのぞいてみようという人たちで盛況のうちに終える事が出来ました。今後も皆さんに喜ばれるよう努めてまいります。

訪れた皆様に感謝申し上げます。有難うございました。

(今立図書館長 上野 巖)

編集後記

出版界は冷えきっているとはいっても、まだまだ雑誌天国だ。やはり特集に目が行くな。(み)

特集を考えはつくけど、いざ編集となると……。雑誌って改めてすごいと思いました。会報はレギュラー執筆陣も増え、たくさんの方の協力で今号もお届けできます。書き手と読み手の声援あつての会報とつくづく……。(杏理子)

雑誌特集ということで、改めて何冊かの雑誌を久しぶりに手にとった。何年も変わらぬポリシーを感じるもの、いつの間にかこんな雑誌が！と発刊年月日を確認してしまうもの。それらの雑誌に共通して言えることは、『決して読む人を雑に扱わない』ということ。好奇心にダイレクトに届くのだ。(澄)

20年ほど前、雑誌の投稿コーナーにハガキを書いては送っていました。今ならネットの掲示板で済ませることが出来るのでしょうか。読者コーナーの常連同士が一体感は今でも忘れることができません。(ヤ)

総会のお知らせ

日時

平成24年6月23日(土)午後1時00分～

場所

越前市中央図書館 学習支援室

総会次第(予定)

- 1:00 開会
- 1:15 昨年度の事業報告
23年度会計報告
今年度の事業計画
質疑応答
- 2:15 休憩
- 2:30 映画会「第三の男」(100分)

友の会会員以外の方でもご自由にご参加いただけます。お誘いあわせの上、ご来場ください。

《会員の声をきかせてください》

友の会は、会員みなさまのものです。会報を読んだ感想やご意見、また、イベントのアイデアやヒントなど、会員の声をどうぞお聞かせください。また、思い出の写真がありましたら、紹介文や思い出(200～400字程度)とともにお送り下さい。会報に掲載させていただきます。その他、寄稿や、図書館にまつわるおはなしなど、どんなものでも結構ですので、下記までお送りください。お待ちしております。

あて先

〒915-0832 越前市高瀬二丁目7-24
E-Mail: tomonokai@lib-city-echizen.jp
越前市立図書館「友の会だより編集委員」

越前市図書館友の会

《連絡先》 越前市中央図書館
《住所》 915-0832 越前市高瀬二丁目7-24
《電話/FAX》 0778-22-0354 / 0778-21-2001
《Email》 tomonokai@lib-city-echizen.jp

